



ルブナ

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

夏の終わり、病院のロビーで、6か月前に母子室にいた親子に再会した。バングラデシュ出身の20歳そここの小柄な母親ルブナとぷくぷくとした赤ちゃん。まん丸の目がルブナそっくりだ。「私を覚えてるの?」とルブナがおおきな目で覗き込んでくる。もちろん! 印象強かったから。

●外国での出産体験

イギリス育ちのバングラデシュ人男性と結婚するために、2年前移住してきたルブナの英語はまだつたなくて、母子室の助産婦たちはルブナとの会話を諦め、大切な話はすべて仕事帰りの夫が来院するまで待つようにしていた。夜、赤ちゃんがベッドから落ちてワンワン泣いているのに気がつかずに寝ていたという一件もあって、ルブナは助産婦たちから「母親失格」と見られていた。イギリス人ばかりの環境に馴染めないし、食事もあわない。授乳がうまくいかず、苦勞しているうちに赤ちゃんに黄疸症状がでて光線治療が必要になってしまった。ルブナはアイマスクをして光線を浴びている我が子のそばに一晩中座っていたのだが、それが原因で吸引分娩後の会陰が悪化。しかし、ルブナはそれもうまく伝えられず、助産婦が異常に気付くのが遅れてしまった。

私はルブナの隣の部屋で実習していて、ルブナとは授乳室で会うくらいだったけれど、外国での出産体験は彼女にとってとても大変だったと思う。授乳室で話している時、泣き

出したこともあった。

そのルブナが退院するとき、「ゼットイ家に来てね、お客さんとして」(医療関係者としてではなく、という意味だろうか)と言われた。その約束を破ったことをこの再会で非難された。ルブナとの会話はたどたどしくて何が話せるわけでもないのだが、ルブナの一寸な表情を見ているともう先延ばしにはできないと、翌週、早速お邪魔することにした。

●ルブナの家

地域で働く助産婦の話では、ルブナは低所得者用の公営アパートに大家族で住んでいる典型的な移民だという。しかし、訪ねてみると感じよい住宅地に引っ越したばかりだった。

大きな家にルブナの家族とお姑さん、ルブナの夫のお兄さん一家、弟が同居している。高い住宅事情を反映してのことなのか、家族を大切にする文化を残す人たちだからか……。いずれにしても、なかなかの大所帯だった。

平日の日中だったので、男性たちはロンドンへ出勤中。ルブナと病院で顔見知りになったお姑さん、義理のお姉さんと子どもたち、そしてよそ行きのサリーを着たルブナが「お客さん」の私を迎えてくれた。おしゃべりをして、ご飯をご馳走になり、それからルブナとお姉さんのバングラデシュでの結婚式の様子をビデオ2本立てで楽しんだ。

ルブナが2人目を生む時にもここにいられたらいいな、と思う。私のコースも残すところあと1年。時間的に無理だろうか。